

図書館情報

— 読書とは、自分の小ささを知ることです —



8月のおすすめ図書

「陰陽師 醍醐ノ巻」

夢枕 獏(ゆめまくら ばく) 文藝春秋 分類 913



平安時代を舞台に、陰陽師安倍清明と笛の名手源博雅が怪事件を解決する人気シリーズです。妖怪に怪異、真夏の夜にちょっと不思議で怖い物語はいかがですか。

「花の鎖」

湊 かなえ(みなと かなえ) 文藝春秋 分類 913



元講師の梨花、子どものことで悩みを抱える美雪、絵画講師の紗月。そしてイニシャル「K」から毎年届く花束の謎。「K」とは誰なのか、3人の女性の人生が交差するミステリー小説です。

「きぼうーこころひらくとき」

ローレン・トンプソン ほるぷ出版 分類 933



さまざまな子ども達の表情をとらえた写真と、「きぼう」という言葉が添えられた写真絵本です。気づかないだけで、「きぼう」はこんなにも日常に溢れているのではないのでしょうか。年齢を問わず、こらんと頂きたい絵本です。

「虫の飼いかた・観察のしかた」

偕成社 分類 486



夏休みの自由研究・調べ学習・工作・読書感想文に利用できる本が図書館にはたくさんあります。人気の本はすぐに貸し出し中になりますので、お早めにご来館下さい。また、スタッフが調べもののお手伝いを致します。お気軽にカウンターにお尋ね下さい。

「休館日のお知らせ」

下記日程で図書館が休館となります。本館・蘇陽の返却は返却ポストへよろしくお願いいたします。

本館・蘇陽分館 8月14日(日)・8月31日(水)

清和分館 8月13日(土)・14日(日)・15日(月)

●お問い合わせ

本館 73-1616

清和 82-3033

蘇陽 73-2755

休館日: 本館・蘇陽(月曜日・祝日・年末年始) 清和(GW・年末年始)

移動図書館車 愛称・デザイン画募集

山都町立図書館では、「移動図書館車」の愛称とデザイン画を募集しています。「移動図書館車」とは山都町全てのみなさんに本をお届け出来るように、図書館の書籍を車に積んで、みなさんのお住まいの地域を巡回して貸し出するサービスです。小さな図書館がお住まいの地域にやってきます!みなさんに親しまれるような「移動図書館車」の愛称をお寄せください。

応募用紙は役場、各総合支所、教育委員会、山都町立図書館、清和分館、蘇陽分館にあります。必要事項を記入して、「山都町教育委員会」もしくは「各図書館」へお持ちください。

詳しくは応募用紙をご覧ください。

★ 愛称は未発表にものに限ります。

★ 山都町にお住まいの方ならどなたでも応募できます。

★ 連絡先を必ず明記してください。

★ 採用された方には山都町教育委員会よりご連絡します。(図書券進呈)

★ 締め切りは8月31日(必着)です。

たくさんのご応募お待ちしております!

「図書館からのお願い」

ご自宅に図書館の本はありませんか?

借りたまま、返却していない本・DVDなどがご自宅にありますか?

お持ちの方は、お近くの図書館へ返却ください。

マイバッグ持参にご協力ください。

図書館バッグが不足しております。たくさんの資料を借りられる方は、マイバッグをご持参ください。

町立図書館講演会



清水真砂子氏講演会 「子どもの力・本の力」

6月12日千寿苑で、図書館講演会が開催されました。講師は「ゲド戦記シリーズ」の翻訳者、清水真砂子氏で、「子どもの力・本の力」と題して講演いただきました。当日は暴風雨でしたが、清水さんのお話を聞こうとたくさんの方々が来場されました。大学の講師を勤められ、多くの学生との交流を持ち、現代の若者の置かれている状況と、文学の関わりについて講演されました。

マイナスの感情を避けようとする若者たち

若い人たちの多くが、悩むこと、悲しむこと、苦しむこと、恐れることも含めて、そういったことをすべてマイナスの感情として避けようとする傾向がある。視野が狭く、物事を窮屈に考えている。苦しみや悲しみは生きている限りあつて当たり前。苦しみや悲しみと付き合つて、時にそれと闘うことは、その時は苦しいけれど、でもおもしろい体験であるということが、本を読めば知っていくことが出来る。



もしも一冊の本と出会っていたら

孤独や絶望の果てに、事件を起したり、自ら命を絶つたりする若者や子どもたちがいる。さまざまなしがらみや、親の束縛に悲鳴をあげている若者たちもたくさんいる。そしてみんな、自分だけが孤独で不幸だと思ひ込み、追い込んでいく。たくさんさんの物語に出会い、悩んでいるのは自分だけでは無いと知っていたら、救われたのではないだろうか。

幸福に驚く力

これからの情報社会では、刺激的なイベントのくり返しが多く求められ、日常のささやかな平凡は退屈ととらえられていくのではないだろうか。特別なイベント以外で、子どもの頃の一番楽しかった思い出を学生に聞いてみた。すると、名前を読んでもおかしな言い方、足音、靴下を履かせてもらった後、足をなでてもらったことなどを挙げる。子ども達は日常のささやかな幸せに気づいている。その日常の幸せに驚く力を培ってゆくのが児童文学ではないだろうか。

生きかたのモデルは物語の中にたくさんいる

子どもの時から、たくさん人間たちに本の中で出会ってきた。同じひとりの人間が、ある時はうんと卑しくなり、ある時はうんと高貴になる。そういうことを本の中で知った。そのことが自分を自由にくれたかもしれないと思う。人間の素晴らしさを知り、世界の奥行きを知ることと自分が限りなく小さい存在だということとがわかってくる。そしてそれこそが喜びとなる。



「幸福に驚く力」かもがわ出版

子ども達にも、大人にも、大きくなるってすてきなこと、生きるってすてきなことだと感じさせてくれるのが児童文学だと思っている。昔話を読むことで人生のシュミレーションが出来るのではないか。くり返し読むことで、どう人生に対処したらいいかを学び、しかもその幸福な結末は人生を肯定的に見る下地をしっかりと子どもの中につくってくれるのではないかと思う。

清水さんによると、読書を楽しむ力を持っている学生は、小・中・高校生の間に、親や兄弟、先生など、本を読む楽しさを教えてくれる人たちと出会っているそうです。図書館でも、子ども達の「生きる力」を支え、培っていきけるような物語を、しっかり手渡していきたいと強く思いました。清水さんの著書は図書館に多数所蔵しておりますので、ぜひ手に取って読んでください。